



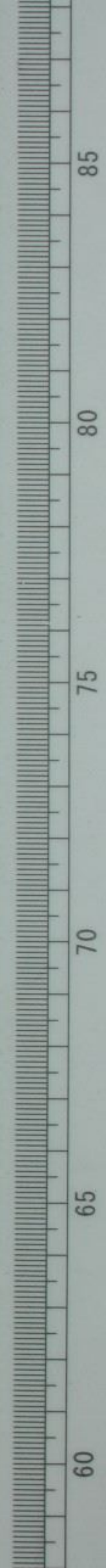
溫故日錄

二

曾

曾  
13  
2

5  
13  
2







温故日録卷第一

睦月

三始

歲始 日始 月始

正月為端月。其

一玉燭寶典

十日亦云三元歲之元。時之元。月之元。

鮑宣傳云。三始。如淳注正月一日為歲之朝。月之朝。日之朝。少人三朝。こもミツノチのふかり。支本立

春。顯朝。卿哥云。

あつ玉代年。も月りも初る。ちる。民をいふ。まよ。まよ。

改年

荒玉月

さす。く。は。三。年。あ。た。ら。ゆ。か。と。く。

ても春也。又荒玉。れ。月。な。も。く。も。萬。葉。か。と。く。あ。ま。さ。こ。と。り。流。布。年。あ。た。ら。ゆ。た。ひ。と。く。云。字。抄。に。い。は。れ。

當年代事。よ。な。ら。ず。春。也。但。句。評。よ。く。と。く。

門 曾 5  
端 13  
卷 2



新年 年立 明年 迎年 古年 去年

去年ニシテハ雑也  
春也今年ニシテハ雑也

唱星

朔日 四方拜礼事也 四方拜と云ふ事ハ元正の  
寅の時ニシテ四方属星と唱へ天地四方山陵  
を拜しぬく年災と云ふ拂ひ寶祚と云ふ祈りさ  
る儀と云ふや 清凉殿北東階ハ御座三所  
御屏風と云ふ事 其中ハ御座三所  
まうけ其前ヨク本此机を置て香花燈を  
と云ふ所ありて 淨御代儀式ありじ  
侍臣なども四方拜と云ふ志を云ふや  
務用大臣家など外ハさる事ハ云ふ  
和五年正月寅

天地四方属星山陵と云ふ由宇多此御門の  
御記のせりまこれ盤觴と云ふ事皇  
極天皇雨を祈りて南御代河上より奉りて  
四方属星一雨を後ハ雨五日すりきり一日  
本紀小のせりま是を云ふ事ハ  
其と属星属星一災難と云ふ事ハ趣天地瑞祥志と  
云ふ書小云ふ事ハ  
有此事 猶江次第ニ委ニ条大岡御所此年中  
事哥合小云

白散 薬子 是ハ元三此儀なり  
と云ふ事ハ主上晝御座ハ出沙なりて生氣乃



方此沙衣をよれつ孫の沙衣御これと小かきひ免さふ  
陪膳此典侍典藥頭も生氣の方此色を着す  
此時先御厨子所此御齒固を供寸命婦茲人  
俊送して典侍次第は表ぬまのりもてて新子と  
姉女此いまは嫁せざゆをともりて是城用事  
屠蕪ハ女見よりのむとふ本文りまは其為ハ女  
女城撰てまののまじりなをくけ薬子鬼此間  
よりすきてはけの几帳此もたさぬふ女宮  
典藥城りて沙薬をりて一献し先屠蕪  
を酒小入く菜子よれよりじ次は銀器よ入り薬  
の頭よりてといひ小はは主上座とてせ給て  
庭津殿此南の戸より入給く御ゆりあめり東  
りかたれ戸よじひくもせ給ハ陪膳御蓋此持て  
まのす是も屠蕪を東此戸よ向てのむ由本文

之れも次ハ女官小返りもハ是城後取よ  
きこの名や一日ハ四位二日ハ五位三日ハ六位此藏人なり  
津もこの日奉行此茲人交名をとり考に  
たてて殿とれすも此柱よをすも二献よ  
神明白散を供もじりハさく此城後取のふ  
幸も大根をとく女茲人ぬりて庭小すく是  
とち元日ハ人々精進のゆかりと江次第よん  
三献ハ度齋散城供も如此御藥此儀ハ三ヶ月  
より第三日ハ沙衣ややくをさる銀器よ入り  
左指小付て御額并沙衣これらにはきり  
右此第四の指をかりてはく是ハ藥師此  
相もくゆりや此菜此儀式五十二代嵯峨天皇  
弘仁年中は一人是とのぬまハ一家  
病あり一も小是とのぬまハ一里ハ病なりといふ

攝文



如方功能信もこれ年れらうりめは是とまらうや 全事根源

異朝来由記さけん茶花記は屠蕪酒昔人馬草

菴除夕遺里人薬念囊浸井中元日取水置

酒樽名屠蕪飲之不瘦云年中約事再合

年一にさるめ初る菓子ハワエはきんきんため

齒固餅鏡 源氏初音れ巻よんがさうてとつわ

齒固元三の日の幸也齒ハうしひこり會齒をかこし

れ心也高器六本小折敷をす一は臺子餅大根橋

と盛也此餅ハ近江れ火きりれ餅を器用なう

トノ懸その周ハ鏡山の哥を詠る也花鳥餘情を

小見らうり

あつこのやがたんとてとれハお孫てとんゆらうと

此哥はよとしてかふ小じこ之河海枚変略ラ此哥と

古今集よこれハ今とれ沙のりつとれ拜ん云 高器

と云とのハなき板れ小鼓の胴のこくたる柱と一尺

余よまん中よたてとけはもき盆也盆れ口より下人指

也たるとハ如此也火切と云在所ハ野洲ハ下下益

也云里の内也今ハ終く田の名と云又伊勢物

詰よとら依らうつさよとりてと云 高杯 真名本 愚

見抄云高土器と書也土ふくはくまらり惟清抄ニ云

じりハ土してゆるふや 今れをうけ本してゆる鼓

此調のかりやうある物也 今業云異朝此祭する神

供とのうらもの邊豆こつその豆こつ物ガ日本の

高杯也涉へとけ御誓こ云義也あうりてふしこと祇

酒よんてらり菴直 日本紀 源氏よおらんへもいつり

堀川次郎百首 俊頼元日此哥云

そつらわらひを成りらぬすうらうらうをさうてん







と取てくひ又如く張奠て名をハ毛瀨モセと名つきて羨  
味をとしてくひきくくや吉野此川とよめて嶺をハ  
く谷ゆくりきくく路れさうくゆりぬ  
常小来朝する事不叶とゆんやきく其後ハ老よ  
参て年魚やうの物を献きくとうや今此國栖の奏  
として哥張謡ひ苗を少兒くくハ吉野より年始よ  
参くるといふ也右ハハはきも公事根源よ之自第  
會此可小可く注し取要記之其上いつと此節會ハ天子紫宸  
殿小渡御ありて群臣百官酒を給く宴會を依て  
持統天皇四年正月よ公心と内裏よりしてとハ此河  
かりすとわら宴會と書くハとハ此ありとあり  
大く此せら志れ名として傳ふや豊明節會ハハかきく  
くく神武天皇此御宇よ群臣我流とて酒行

一 事ハ日本紀よんくく是かきくも事此發つて  
中一き此光仁天皇寶龜四年の春よりハ五位以上よ  
ぬす由と給ひきり今もさやう  
れ心して事えてく禄を給事と

初鳥  
元日ハ曉此鶏のこつ  
音也 流布 夜分也

筆試

曆關

門松

門カド每ツネニ立タテ小松もいつり 素盞スサノハ鳥尊トリノミコ此南海へかきく  
一時宿と巨且將來よかりのひとさきともく  
ず蘇民將來を張く一奉る其後尊いつりて  
巨且を去給一其家をあらがさる是を後の世ま



のちとてとて巨且が墓の上よ生たる杉  
年此始よ門よまゝ此奉晴明が蓋蓋内傳小  
あり委祇園會此所よ可記是門松の縁也  
ハあれども一条冬良公此御説よは松ハ千年を  
きり竹ハ万代成ちる物を従て年始れ祝事  
よこきをよてゆるめよ  
畧記之は説を仰き竹よとて

年越而

若水

立春日隨季 拾芥抄 包井開 若水とて  
事ハ去年御生氣此方此井を點して  
て人よくせよして春立日主水司内裏よ奉ま  
朝餉して是成さるる事ハ春立日  
奉まば若水とやや年中此邪氣成り

けふ本多あまはは是を供す江帥屋房卿  
次第よ若水成のし時呪をとある事  
えり公事根源 是とて井ひくも  
是立春此事也連哥よ元日といふ人あまも  
之袖中抄よも云  
うらなひききふら春此よまの井よむす  
ワ多とて立春の日も此の御やきに水と  
よ也素内志く人ハ元日よとて  
賀茂此御ありとよ朔日よも  
あるを親ハ立雲ふたす  
堀河院の御時よ立春此朝よ御前よて今日此  
とよめと宜有ありきまは後頼朝臣  
考よめと河と水よむすやち此初  
以上是顯昭此説もわりのあり又寶治二年百



首拜としてまつりくる時年内立春といふ事と為

家イロの事

彰考今雜上八

於氷イロのけふききし暇なれらるゝとて志すや春のこゝ水  
い年の内よとよめるふくもあはれ事なれども人  
いごもいそいでゆくのこ或へ元日は立春にあつては  
小をすす一若火は年と春とれあふ際なりといふ日  
よ立春にあつる  
時れ歳且あしり

初夢

立春に朝乃ゆめ西行家集に立春朝とあり  
手と程ぬ春と一とほひひにまこくんとてかあふる夏

凍解

氷イロのけふと  
ふと春  
氷流イロ只流イロは氷をじすひくるとり  
よてハウ神より冬也といつり

氷消 氷際

東風

月令に立春に東風解凍とあれハ立春に所は記之  
哥小も春立き少風やとらんるくあり但三月は渡

若菜

七種 内藏寮并は内膳司より正月上の子日は  
と奉る寛平年中より始まる事や延喜

十一年正月七日小後院より七種は若菜を供す又  
天曆四年二月廿九日女御女子の節長若菜を供  
此由本手部玉に記ふるより若菜は十二種供

する事あり其くさくは若菜 蕨菜 菘 苜蓿  
芥 蕨 薺 葵 芝 蓬 水蓼 水雲 松とん

之より此松の字は事白川院御時師遠は清尋あり  
は若松と書てこの初めと讀たりよは事  
ゆくやヤキ松はそくもくさくハひ事  
上皇被御侍尋常ハ若菜ハ七種の物なり  
菘 蕨菜 薺 芥 苜蓿



御形 須須之呂 佛座なり也 正月七日小七

種此菜蓋菜と食され其入萬病なり又邪氣

城のそく術よけりともくともり 公事根源 拾芥抄

十二種 若菜ハ 若菜 菌 菘 蕨 薺 葵

蓬 水蓼 水雲 菘 芥 苳 苳 苳 苳

二同の菁ハかふちと拾芥抄より又 苳とより

也 是今爰小書ハ皆連哥ハありて春小

版よりあるん註に記之 事也其外を書けり

ことらんのやうにもなり其季張おし四季より

一他准之若菜ありハ苳とてはひ又のひなり

こと摘正月上子日又正月七日具れ 八雲 正月七日

後小もおほくより連哥なりと平句より七日此事

よきぬも又あり 新式抄 或抄小

古今春下

苳のそくの類の苳と云は但世奇ハ苳と云は苳と云は苳

い奇ハ苳注云つらねと云は苳と云は苳と云は苳

とことなきなりと云は苳と云は苳と云は苳と云は苳

さるべし也心ハ苳と云は苳と云は苳と云は苳

若菜 苳と云は苳と云は苳と云は苳と云は苳

菜摘 苳と云は苳と云は苳と云は苳と云は苳

朝菜と摘 苳と云は苳と云は苳と云は苳と云は苳

惠具若立 苳と云は苳と云は苳と云は苳と云は苳



ふり但ゆき文へ介しあきあきして物の異名  
ともあきさる名のつりしは別よりきり事あり  
まて一定よあは俊頼朝臣のつれと仲實朝臣の  
とくはつれとてあはる事  
とくはつれとてあはる事  
か

心きゆれをよまはていふゆより  
今云世舟ハ多くとあきとありか  
月相とありらう童蒙抄云多くと人れ  
ろくとあきる一カ葉よせりとあり  
とくいとあきと名とあり  
袖中抄 畧記

新撰六帖具外代とれ集よあはる舟とげえ

子日遊

初子日 小松引 子日松  
初子のつれをよまはていふゆより  
初子のつれをよまはていふゆより

世ハ万葉集の家持御れ哥なるふや此玉帝  
父草よ子れひれ小松と  
田舎れ家よ正月の初子の月  
事一袖中抄よ委つていふ公事  
人とあきるといふ子日遊とてねと引  
圓鞍院三條院の御時よ  
月十三日れ事也路れ御車  
く成て上皇ハ清馬よ  
あきとて殿と人ハ布衣也  
うとて小庭をよまはていふ  
りひつ檜破子やりの物とあ  
其時れ序者ハ平兼盛と  
とて子哥人とていふ



















聖武天皇天平比ハ踏哥ノ儀として禄  
 給として仁義礼智信ハ五文字を短尺母書て是  
 と云ふ事あり一む仁ノ字ハささりありしもの母  
 礼ノ字ハ綿と云ふ義ノ字ハ取當りしものハ禄と云  
 布ノ字ハ綿と云ふ智ハ布と云ふ信ノ字ハ段常  
 ノ字ハ六位以下ノ人ノ琴と引くことひいて  
 續日本紀  
 延暦十四年ノ正月ハ詩公作りて云ふ事あり  
 更記ハ不及踏哥ノ節會とハありし事あり今  
 あり共ヤリヤ或ハありし事あり今  
 延暦十四年ノ正月ハ詩公作りて云ふ事あり  
 更記ハ不及踏哥ノ節會とハありし事あり今  
 あり共ヤリヤ或ハありし事あり今  
 延暦十四年ノ正月ハ詩公作りて云ふ事あり  
 更記ハ不及踏哥ノ節會とハありし事あり今  
 あり共ヤリヤ或ハありし事あり今

此ハ踏哥ノ事ハ公事根源中略ハミノ綿ハ  
 河海抄云踏哥此人以綿造花冠額也号  
 高僧云云孟津抄云綿をひいてかづく  
 西宮儀東抄云高中子之六位以綿裏面云  
 云年中ノ事并合  
 此ハ踏哥ノ事ハ公事根源中略ハミノ綿ハ  
 河海抄云踏哥此人以綿造花冠額也号  
 高僧云云孟津抄云綿をひいてかづく  
 西宮儀東抄云高中子之六位以綿裏面云  
 云年中ノ事并合  
 此ハ踏哥ノ事ハ公事根源中略ハミノ綿ハ  
 河海抄云踏哥此人以綿造花冠額也号  
 高僧云云孟津抄云綿をひいてかづく  
 西宮儀東抄云高中子之六位以綿裏面云  
 云年中ノ事并合  
 此ハ踏哥ノ事ハ公事根源中略ハミノ綿ハ  
 河海抄云踏哥此人以綿造花冠額也号  
 高僧云云孟津抄云綿をひいてかづく  
 西宮儀東抄云高中子之六位以綿裏面云  
 云年中ノ事并合











あぐり秋よとよめり万葉第一冊

秋の田代あぐりよまきりあふれすも流れきたにわる恋をまん  
といり夏もいつも同じあつる物にまじりて一の後成  
いり七夕よも霞の川とよめり八雲御抄よらんり  
其哥万葉才八よめり只霞よ夢をむすひくハ霞  
のうらはよ美よらて春也とむらりあつる御り

かすひる云詞 非霞字但詞乃けきやふて嫌  
従物秋霞乃心よ可用者春の季

とりつ美也 新式 かすひると云詞春よなうすや  
いこし宵柏の句よいく物ひすひんると美此句か

きはかやこれ詞ハ女あひりハこれ美よある也他准之  
流布 さいと物いひかすひんとあるハ幾又重とつふてあ

一とと春よ用らる一是新式ハ文言よよく相か  
りひゆりかやうあつ文をかさうすめ物といひすひる

とん掠れ字かれハ抄いひとよもさうハす春よもあつ

と知一五言抄よ文なしく書かすひるも春ことあき

と家ハ新式の昔よたふ秋但當時用る所五言  
抄のこくこんり新式抄物ハ春の季此時ハ従

一折越嫌也春の季あつるも霞の字ハ二可  
嫌也云云又同抄ハ何とあひりハす一てもかこひる

ハ春也とあり當流かこれとこハともけあわらめ  
かう注こしちる時此宗匠よまうすや

よ千るさびとい 網 非水邊 新式 かすひの  
ても春なかり わとよ似ると云事也

海 非水邊 同 色 衣 衣字ニ可隔ニ七  
従物 白但不可レ為

衣類 袖 涙 眉  
新式 のかすひかとも春也  
そいきも此也 流布











梅

但八雲よ夏さきこのせりきとんはふりよこを愚管見  
 ひろくぐ重てふゆぬ一朝さきも哥よあふぐわす  
 或書よこも是萬葉第三長哥又同第十五は長哥に  
 ハ冬木よりさきこのめをれハ勿論初春也されども深山  
 とよハ二月までハ弥ゆるやうとするも此ハ大發句帳  
 宗祇の夜ハ春をうけは冬の梅さく深ハ如那  
 深ハ寒故ハ冬木此様ハよびく咲かり梅ハ雪成  
 じすハ 壺 麩華 舎と云涉教乃名かり梅成ハ  
 春也 藤はハ此所ハ委可記之  
 梅壺梅ハ西ハ白梅東ハ紅之由有清少納言記云  
 在飛香舎北 順和名 一説梅はハ雜也といふハ非也  
 春也 藤はハ此所ハ委可記之  
 一曆 或書梅衆木前花發故号木花云云云ハ  
 梅と諸木ハ先よこつて梅曆といふなり

柳

奥儀抄 或ハ梅のさくはえとく春ハ來ととあるハ梅是  
 山家曆に有ハ大發句帳 春まきてはくハ梅の曆ハ  
 此花 といふハ木乃花と云説ハ異説也為家代明疑也  
 此花 ともけ説といハ 宗祇古今抄  
 雪成じすハくも春也  
 未のさきまてハすののま  
 うこふある柳ハ枝のいゆれり  
 八雲 稻庭の前ハ委可記  
 揚花 も亦同訓柳乃 眉ハ人の目ハ似り  
 一系 系ハ  
 一髮 髮

青柳

一 稻庭 是ハ水乃

柳絮

松花

十迴花 初春ハ物也 流布 松ハ千年ハ  
 十度花同也 百年ハ十返

松緑立

松緑ハ雜也 緑立 松初緑 松若葉 御  
 若緑ハ春也 新式



十一日、御連哥よ生とよやきぬる葉のなほひね

昌隆

若松 松緑音各春 松緑添音も春こいつり或書云  
新式抄物音也

とよふとてゆ春とあれと道理あつらんみとらとふこ  
云ハ只緑の色れつと成とふ也立とふハ何とて  
んら此れか生する事也各別の事也不可信用云  
云好所よ志とふ一或秋但昌程ハ春也といつり

不月

ウとて初らばふなりこのめらるる節を  
よめりつとむとハとてふなり

萌木陰

三智抄ハ春此部ハ入源氏若菜トよ色くの  
いととて此とて花の本もよつめりしぎのつけ

云 同抄

云とてえきれけがみ葉のこさきとてさゆ也  
津抄云萌木ハとて淺縁なる木陰ハ深塩草云とて

木のつげハあそこらとてとて 説と志とて為頼家集

夏此とてゆは家のとてえ本とて

おひみする庭れとてえまのころとてきよそとてゆとて  
是ハ新樹の芽也木の下園音ハ夏なるゆなれハ春の詞  
なつてゆとてとてとてとて春ののすら哥ハ代集味見  
後振春上  
とてえ初る本れれ見とてとてとてとてとてとてとて  
かやとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

初草

新草

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
小わつとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

秋若葉

宗碩、藻塩草ニ云  
是ハ取分正月也

下萌

植物ハ折越音煙 新式 或説二月こいつり但月令  
草木萌動 兩水ノ節ノ未也霜雪乃下りとも春

豊

俗用、莖立、二字、蔓、莖、苗也 順倭名 拾遺ハ物  
名よとめり万葉文木等ハ物名あつてもとめり也



贅蒿摘

萬葉第十

去日... 春野の英芽子採て者

蘇月七高七卷食經云蘇月菜一名菘蒿

崔禹錫食經云狀似艾草而香之作葦羹食之

置人やおん此はひく三益山春日れりのまのうらふ

新撰六帖衣笠内大臣哥也同集信實哥云

今日ハ... 此れおりたつてせておんれも葉れ較やとほ

此外新撰六帖支木およぶるおほ

鰯鳥

未れ春まうて

枯野霜

かこよそ 春をみとし すすひくハ春也 流布

百千鳥

もまま 毎言抄 於御城正月十一日御嘉例の

御連歌の第三 鈴多は百千の春を立て 昌純

或抄よりちれをともちりひくハ春よなるハ如く云

但春たす

春上 ちりちりハ或ハ

頭昭云もちりちりハりちれとつと云ハ百千をとかざり

わらくれをともちりハりちりハりちりハりちりハりちり

あまことそれいりとおりの萬葉集哥云

別して名れ名とさすハあハ別のおとま

まのりの名とさすハ相遠秋名抄云りちり

まのハちりちりハりちりハりちりハりちりハりちり

まのハりちりハりちりハりちりハりちりハりちり

黄鳥と云ハ又云百千の名ハこれ名ハハりちりハりちり

くれをともちりちりちりちりちりちりちりちりちり

りちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

りちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

りちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

りちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

四五



ことなること又鶯と百舌鳥といふ二の名ありともいふ也  
 此書より小鶯ともいひもろく此書ともいひくこと後ま  
 らぬくらひ一鶯といひるる一鶯はたなり一母名扱よこ  
 一はるるはるるといふと鶯といふははるるをこにせは  
 一して此書といふといふこと也以上袖中 畧記之八雲  
 御抄鶯の部に入注よ云、是ハ鶯よかまらるる是春  
 百千鳥之轉也但鶯よ詠有例云或説よいつるも  
 百千鳥ハ百子の名也鶯といふのうららるるといふ但  
 鶯はむひことすといふこと也 毎言抄よ百子名鶯よ不苦  
 といふも鶯こと清扱よありげゆよといふことふりちる  
 ちをきららるる云或説云百千鳥と黄鸝ウグヒスの異名と  
 ておとかわるること説ひる事也不可用但拾玉集やよ  
 慈鎮の哥よ鶯の題よといふ百子名とよありこわく  
 やこれありといひの事ハ正説傳受せぬ人ハ其國や

柳衣

柳衣 かやう 此衣の事これ月くれ其をれ 李とともく其  
 名よ或ハ梅或ハ柳の花軟なるとあまハ其まらるる  
 よいりて大いこ是よハさうのときゆるり此ハ四季とも  
 小同他准之まらるる事ありハ河上好土よ訊トクシ  
 又挑花葉葉よ其色くまらるる委可見之ヲ















童蒙よちりてんふれ引哥ゆ少記之ヲ

率河祭

上酉日 此祭ハ春日祭の以くる日とこかり神祇  
令よのちり三枝祭と同一かふくハ四月とては  
藤氏南家の口傳ハ率川社ハ右大臣是公の建立  
といりくりハ事ハ又三枝祭の取よの子ハ公事根源  
十一月とあるなり

園

韓神祭

上世日 此二社ハ官内者より

延曆遷都の時造官他所より  
座とのせり祭礼ハ年廿二ハ二月と十一月と  
上つり信じふ儀式ハ西宮北山江次第  
やハ此書よれせり公事根源 若有三世之時用中  
世日但春日祭後世云云 見延喜御記

云云 拾芥抄

大原野祭

上卯日 是も十一月と年廿二ハ二月と  
后宮のまのせりんふ春日日本社  
よて都ちりたふよりもふされハ大原野行啓  
こハ事ハのゆや仁壽元年二月ハはりめを  
る近衛乃使ハ春日祭小ハ上つ井内侍  
をひふ公事根源 當日使立 拾芥抄

初午

初乃午の日 稻荷よまらつる事ハ頭仲朝臣  
とハ先代哥ハ堀河後百首  
新撰六帖ハ光俊朝臣  
二月やハ初午れとしてハからハ

蟻

六百番哥合判よかひヤク下の義よはきてハ蟻  
食其室とハ蟻室ともハはる是ハ後頼朝臣



此書てゆゑ物よもみくらきれ事といふ所は春初子日  
玉くらきとわらて蠶室をかきりし祝ひもひるこ  
いふおりのそ蠶養れ法ハ正月初子日午祭せせ  
る女子をうひ姫と稱して蠶室をかきりし祝ひも  
ひる也次は二月午の日しりて蠶れ胤をかして  
暖日よあつて三月午の日しりて来よけて四五  
月城まひりて時寸云とら春のころひれきふのむらさ  
代事ハ皇后抄袖中抄八雲御抄ハ委すもハ夏  
祈年祭 四日 是ハ大神宮以下三千一百廿二座の神  
とまらせとまふ其取たけりたるもとま  
くよをのく幣をけきり諸國よも年ふひのま  
けりてゆふし周礼ハ祈年ハ豊年ともひるこ  
こころ神祇官よてとこなり弁かひてしり諸國  
のり物ともしりし白猪白鶏やりの物也

天武天皇四年 二月はけりて此祭をたて祈年  
乃祭月次兩度新嘗祭とハ四ヶ代祭とて國の大事  
こす也 公事根源 拾遺 愚草 負外上  
あま此年ハのこしり物れ法をひりて二月のそ  
年中の事奇合よ  
いふそふしれをたて代を三とせりしりし

佛別 去佛 二月別

隴月夜 三月はけりおりのそ云詞春はあつる月夜と  
こひくハ春とて 流布 霞ハ隴ニ勺嫌新式

鐘隴 隴夜なともま也 但二つともよ  
嫌詞ハ每言抄ハあり

蜻火燎 陽焔をよ青陽ハ氣の煙のやふふとゆるそ  
ふかきりふのとゆる春日こゆる是也



八雲御抄

遊絲ユイシ 春あつて夏ハゆりてれくるもの也  
 林希逸リンキイ 莊子シュウシ の義ニ云、野馬ノバ 遊糸也水氣也  
 杜子羨トシケン 所謂落花遊糸 白日静ニ云 又莊子ニ云  
 其急似野馬之走ト云 言心ハ春乃空ニ糸乃了  
 たるもの遊絲と野馬と云はひつるふ、陽燄ヤウエン 之名はけり  
 又ゆづが糸のあそぶよも似たる也

蘆

草木よりいづり其糸要ニ  
 云斬而復生 曰蘆

蘆角組

草此はのこし皆春也 芦アシ 小かきく久真薦荻カキク  
 落なきはこれくひとふ春也

詞花集

まこと草此乃こもわくるはよハはるぬ物もとなれり  
 春風のふつぎとこらひむはれはむ花のけり未とあら

すのこひこ千五百番哥合よ小竹は哥

若草

草若緑 草若葉

木のこも葉ハ夏也 葛乃  
 若葉菊カキク 乃多秋乃

若葉たると秋夏乃季とあ草  
 もつ葉とすれいれ春也 流布

若草

萬葉

後拾遺  
 此のこも葉は草の名也 今葉ハ若草と可云 欽  
 綺語抄云さわかつとこらひむはれはむ草此名也 袖中抄 下吟

芳草

新式若草此  
 事也 流布

若紫

春也くひくさたとくつらハ  
 雜也花とじとひくは秋也

蕨

詩 蕨毛







土筆

丈夫<sub>ニ</sub>為家

さほひめい筆かともなるはくじくもつれりたる春れきり

烏芋

春也堀河百首よ

とをりこれとこのふまゝついでともそのれ小田まゝるる

水葱摘

春也水葱がたは夏也  
秋云説ハ非也 昌程説

椿花

只椿ハ雜也花はひすひくハ春也 流布  
假令花此字  
なぐても咲教白椿かうしてハ春也但白椿立言抄嫌詞也

紅梅

嫌詞也

八重梅

丈夫よの字あり

てもよめるあり

遅梅

咲よよ色のを梅初梅宗砌 東坡

詩二月驚梅晚幽香此地無

侍花

花茗

合はかめさ 八雲 梅のさるる  
こいつり但梅よかきさるるす 藻塩

花催

花火燈

花灯

初花

花紋解

すくは是等の

年ハ二月も三月

もりて事也

初櫻

初花櫻

糸櫻

獨梅櫻

同上<sub>ニ</sub>丈夫<sub>ニ</sub>後

頼哥よ

おもとこんきり移れ枝おちし柳乃系る心すゆふききり

樺櫻 古今物名よかうは梅とある是也 和名集よハ朱梅  
とまうすし紅れ花なりし 細流 各がさくの梅

しりしやこんきり

二月の部よ記之

歸雁

所れ名所 別 北行 雁  
雁よかきさるるはびとひくも春也

鶯

一渡

一巢

春也吉日とさりて  
巢とくふ物とさり



鳥巢

諸鳥の巢大なる春也  
水鳥此巢ハ夏也

鳥古巢

子規巢

式し三  
月の部

よのする本あきこも  
今こも鳥巢此次てよ記之

鷓鴣

萬葉よ嘗れこ此  
あきんわく春也

よめり下略いしれせよもちかく嘗の巢より時鳥の日  
成る事河こいつり父ハ郭公也母ハ嘗こ父よりは  
似て母よし

鷹鳥巢

新式抄物なくは春とあり  
雜こよ一説あり非也尋其

義春也大發句帳春部ハ周桂句

けしやれ巢山ヤヤ井庭ハ松諸鳥の巢これ春と

あきこ是等あきこもるん母とよんこハ郭公ハ巢こ

ても夏又鷹の巢ハ雜こよ一説ありゆかこれよ記也

鳥轉

諸鳥此轉皆春也三月よわる水鳥もえはるを  
いり伊弉年此時神田天神して連年此席ハ

けかりてるれえはるこ云句ハ池と付ゆらぬ時  
其座ハ人同ハ水鳥れえはる事ありや予云源氏  
橋姫ハ池のちもごもれをいおらへるものぞと云  
つるあきこもるこもるこもるハ口早

顔鳥

春也かやよ鳥たけ事也 流布 かの多ハ春日山  
音羽山もるよめり片戀するりのとつらよめり

多るんあきこもるこもる萬葉第十よ

容鳥此すけ敷鳴春此野の草根の志を記あきこもる

源氏物語よもる是其鳥と定欵但定家不知之

とよ推之 只つらくもる欵伊未決之 八雲抄抄

第三下河海抄花鳥餘情藻塩草なるといふ

此説ありといふハ雲抄抄よ云ふ花鳥より定家

卿不弁但其花鳥となくつらくもる花鳥也とか







行幸乃御狩の一夜古山をわづらひ初く氣を所りし  
きれハ源政頼上北尾ニきりて白き尾を以て継ぎり其  
心も憂ふとのが尾北とりの白尾を跡書とてくまきり  
とく深之のゆゑ心あつていんあつていん御門  
不審乃時政頼哥

白尾白尾とれ書はちり縁も心まきりていんあつていん  
こはりきりといふ心より白尾と書継也同百首此哥は

物あきれうすもれうらのををてゆりまきりていんあつていん  
け乎よけて或新式抄物よ春ハかきりていんあつていん  
少よるれおれ二三扱白き扱てけいんあつていん  
猶鷹飼代口傳ハお書れ心也と藻塩草もいり

枕保姫雁

春の部此注よりいり  
おえや梅ふけきつてさびれれりおんてかていんあつていん  
さびいり書るとハ春の書れ惣名也 定家 三百首

うり川此おふりれいんあつていんあつていんあつていん

二三月よおんていんあつていんあつていん 同注

或ハさびいり書るとハまのいんあつていん

蝶

春さきりてれおのさきりていんあつていんあつていん  
八雲御抄 梅りりてあつていんあつていん 詩ハ下生不得近梅花

とつり但只梅乃時分をいんあつていんあつていん 藻塩草

たつひあつていんあつていんあつていんあつていんあつていん

壬二集中ニ家隆卿ノ哥也拾遺愚草上ニ定家郷哥云

菊れてさいふ蝶れえぬれえれちる花やあをれをりていん

初らうらうらあめはくゆへハ雲御抄よかつていんあつていん

櫻衣

題るしの外ハさきりていんあつていんあつていんあつていん  
表白裏赤花 桃花御説 桃花葉葉衣色異説云  
表白裏此系たつていんあつていんあつていん 三月と云



温故日録卷第三

彌生

奉御燈北斗

三日

是ハ天子北斗ノ灯明を尊りりか

じり北山露岩寺なりけり所ノて高々

峯小火ととりて北辰ノ供をせり一條院の

清記なりともえりま一日ノ御神事ノ事

今ハ清灯此義ハ多て内ノ御秘をりそ竹ノ御殿

ノ北に北ノ御座以敷て三度御拜あり延暦十

五年ノ御りて北辰とす公事根源 中畧

曲水宴

同日

流觴

巡水宴會

曲水宴乃ノて

三月三日也是ハ古ノ王ノ多て御前

にて詩成作て講せりや御溝水ノ盃



つゝ文人以下是とのじり康保の御記ののりき  
 今幸り雄略天皇元年三月上巳日清苑に幸りて  
 めくらふれと云ありきるす日本紀よき曲水宴  
 八周のむらりけりや文人も水のみをさるる  
 わくくろと上り盃飲なりて我もさるるさるり  
 詩吟他くきの盃をとりてのむさるるる羽觴花  
 ちとくふ事もい事なりと又上巳のりくこと  
 人これ東流の水の上りて漢書なると  
 ありせり 公事根原 萬葉第十九 曲水宴と云る  
 中納言家持哥云  
 新古今  
 かし人も舟はくくあふてふ今日そ我うせこ花うくせよ  
 舎傍玉の競伽河の三月三日其水とあり河のや  
 りて道遠すれし諸罪  
 巴字水  
 減さるる見内典袖中抄の委

夫木・権僧正公朝哥下。

かきあつたの字れらるるはとてそよのそんるまのさつこ  
 けりいおて祿とのそりゆあふかきとては字のまれの  
 悉鎮哥也又同作者

是これ三月三日乃哥也夫木よのせり然ハ巴の字水  
 ハ打りやせく春なるる三躰詩 巴江學字流こへ  
 然心然ハ三月は不限飲之藻塩草よんてり但朗詠  
 よし書巴字知地勢思魏文とつは曲水のこら  
 と巴代字は似る也所謂巴字乃本躰也◎如此ある  
 かり曲水の地勢是は似るなり又朗詠は水成  
 巴字初三日源起周年後幾霜たつて三  
 月三日此事也初三日とは三月初三日なり周  
 年こえめくる年月と云也そまは周代よそ



去也周代は周公且こ云一人浴邑と一りて曲水  
宴と始りて一也後幾霜とこ其後幾  
れ一りて經るると云也年城ハ星霜といて也

己月後上巳 河海抄云漢代三月上巳日百官

東流水上禊飲自魏以後用三月三日不

用上巳鄭國俗桃花水

上以上巳枝除不祥猶委

須磨御枝上巳日 是ハ光源氏須磨れ浦は左辻  
の時三月一日よいてさるる己の日陰陽師

踏青 唐上巳の日曲江乃からりて都の人とく一  
酒をとのつ青草とを遊戯する事なり

歳時記圓機活法なしよとくさる事支類聚はは

三月三日上踏青鞋履よりあり又圓機活法の

一説ハ蜀人正月今日キ女遊戯謂之踏青云

桃 二月末よりさるのなれも三月三日

と宗とする或ハ三月三日はからい

南祭 中午日 石清水臨時祭也まら二月比より

試樂の事をこの試樂ハちはとこをれはぬも

代のとめハ必あり一試樂も調樂もいつりまら

音樂とそのころひんに當日ハ御櫻あり庭

座に使舞人はく大臣以下かきは花使舞

人の冠は三献ハ五献とてかきはからいを

の事を天曆五年四月廿七日をめては臨時ハ

祭ハありさるをこの年將門ハ乱逆ハ事を

一時の事ハ八幡大菩薩とりかのお門



う首とまきりぬひきるとぬん其報賽乃くろ小臨時  
乃祭とまきりぬ其時の使ハ播磨守允明の朝臣  
舞人々々人々あつ十人云

新らるやうに其の石法乃ゆ末と成くはくすうん  
是ハ其あり此等よなんゆりきるとあつた天禄二年  
三月より毎年此事ハ成ゆる次の日ハ還立の  
儀を南祭ハ御前よめさげ弓場殿にて勸盃を  
くたすたまふ 公事根源中畧 江次第六云有ニ

午時ハ用下午ラ昔ハ南祭ハ還立なくて賀茂  
りよき一由雲圖抄よゆりを代とこあり由江次  
第ありにもえくこり 堀川次郎百首ニ石清水臨時  
祭ノ哥云俊頼

ふみりのかさひけなうりせばおちて流のりりせ  
南祭とするハ常乃事也 男山をふりてひれ祭にて

なすして春也宗日向也正方面吟子句云  
いふえひすれぬのゆ末と云句よけけり

桑子

三月午月よりめて桑云  
付る事ノ前よまきり

新桑摘

萍始生

月令ニ穀雨節ハ氣候  
也本朝して春なり

鎮花祭

是大神狹井乃ニ祭とよと神祇令よのせ  
つよま花の死ふころを疫神分散して人を

介やまするたよかきんあづらん為ふけ祭ハまこかや神  
祇官してゆりる 公事根源 新拾遺第十六ニ明白前  
庄大臣哥云

小弓

夫木第卅ニ慈鎮哥  
秋の稻のおさゆきとせれん解らぬあまひのまきり小弓



連日

とよ事人として暮る事也  
事此をそれよハあらん 新式抄

永目

弥生山

名取よあらん 流布只  
まのふ事也

夏近

夏を隣

待夏

春過而

春あゝぬ 春あゝるや 春を隣  
四季よりふおなり其季より 流布

花

一ノ波一ノ瀧一ノ雲

上三ハ新式ヨ可分別物此可  
おせらたよりおむつ一春詞

いりよくを洗ん何乃むつ一き事おなり 新式は  
くまぬ人ハ訊べ一但新式とよくまぬくまぬ

今爰ハ異説を居りて委キリ明キリして記一と記ゆふ

それと事なるをハ不記之ラ其上季はとわめたるの  
事と第一とする扱を去爰乃事ハ注よるに不  
及四時他准之但事よして委の千事も有り

一雪 植物可嫌之 降物不  
可嫌之 新式

一雪吹

全

一衣

一袖一被

花衣正花也植物ハ打越嫌一衣類  
乃ハ本也然も花の袖も 同前

一 流布花

衣裳之色花木

不可為植物但依  
其色可有其季

此被同

新式 是ハ衣裳ハ山吹色花染をくハ季紙ハ打  
括也あらんといふ儀之 毎言抄ニ云く一のふはと  
とも草木よりふその色をくハ季とあらゆは打紙  
遍一ハ山吹色花をあらわるといふ類成一と云く一



又繪ふ如く草末此下ハ櫻と繪ふ事ハ春也紅葉  
と如くハ秋あり然と季ハ花もつゆふよハ物ハ打越姫  
と云説不謂花也ハあらずと奥山乃くまきこり首  
尾相凌一して難決すてよと代乃宗匠宗養句ハ  
打越ハ一もさふとをきてハ吹色此衣を付るまはれ  
ハくハ一かろとてとて又新式ハ忍摺植物ハ  
何らすとあり是一とてさる魚一然ハ新式乃旨依  
守一とての也を代打越姫こハ新式乃文意ハ  
不次但時ハ宗匠ハまきこり一際ハ一て不可  
論猶ハ一ハ當流ハまきこり事ハこれハなうん

一皿 正花也その花櫃ハ常ノ事也式ハ其  
時節ハ此花依ハむじろハもれあり流布

一籠 一昔櫃はむ竹の花こまきこり僧ハ櫃と入  
こまきこり時ハ此草木の花とつこたハ勿論

正花也植物也花

又此同前花つじ籠

又机乃脚ハ花こまきこり流布  
凡ハして座ハ佛具をくすゆ机

也植 物也

越嫌也 流布

一リ姿 植物也正花也但句狎ハよまきこり  
ハこり流布 姿ハ花も春とこり

一面 同後撰ハ花のありてハ  
あせつとあるまはれり

一眉 一ハ友

一ハ友

一ハ都

正花ハなまきこ  
ハ説ハ一と代

一机

源氏物語 鈴虫ハ一ハ  
あり花こまきこり机也

一瓶

勿論正  
花也春

一席

花の座也又花のちり  
まきこり花ハ一ハ

一ハ心

詞

ハよまきこり  
難の部ハ委女可記

一ハ顔

同前

一ハ貌

一ハ伴











刺不花

躑躅

木也 新式羊誤ラ人良ハ之ラ躑躅  
而死ス故ニ以テ名レ之順倭名

馬醉木花

馬ハ食キ此葉則チ醉リ故ニ云ク馬醉木一堀河百首  
後頼

よりけをけ玉回横...ふら物にし...あせ...花...  
な...や...花...の...字...新  
撰六帖...光後

本方花

万葉...花...の...似...由...たり

今法

里人...や...葉...は...今...ま...め...れ...る...

信實...後...孫...や...の...ま...れ...る...宗...因...

新撰六帖...の...哥...也...堀河次...即...百首...後頼...哥...又...能...目...

家集...な...ふ...り...の...哥...と...く...り...宗...因...

桐花

文集...ニ...云...答...桐花...詩...花...紫...葉...青...々...月...令...清明...

歎冬

實...り...比...物...也...後...拾...遺...也...

藤

草也 新式 惣別  
か...つ...草...よ...用...也...

壺

飛香舍...在...弘徽殿...北...一...壺...



梨壺とゆふ雜也とこり萩殿をくは杖るもこは教ふ  
ホ雜なる事不審なりとてめく送乃書目よのす  
とみよひ道ハ定むる法方と可守事なれは  
是牝ふう花又梨壺かよ花ふとてすく春  
梅壺が桐壺かの匠ハさくも昌程へ梨其儀梅壺  
若は不ハ春也梨壺が桐つハ雜也こり梨つハ桐つ  
もあつハハ季也云云 每言抄よ前つハ雜也恒の書  
のす上ハとかきる文言ハ新式今案も見よハ式目  
あつハやわつハ仍若つハ當時春よ治定寸梅壺が同前

薑菜

茅花

ハ雲よハちむれとありちハぬけハ同 一事也淺茅  
ハ花の事也 藻塩草 万葉第八  
茅花彼淺茅之原乃都保薑今盛有吾戀誓苦波

新撰六帖知家

菴蘆子摘

此ハ此の芝草かよわて表のほろも人まのり  
あつハはくよろと代ハ是ハ俊頼家集あり

若和布

粟蒔

紹巴千句よこころくハ酒行あれと云ハ春あり  
夏よハなやそとハ夏れハとハ或説ふ  
云花圃よあつぬまハ無名ハ種まよハ縮の事  
其外萬此種まよハ春也粟まよハ五月也刈ハ  
八月也云也紹巴代ハ合ハ夏也云今按  
云然者可隨所好但先達ハ懷紙  
ハ似ハ其まハ春部ハ注之







